

私の『続・リーディングズ情報社会』

庄司 昌彦

武蔵大学社会学部教授
国際大学 GLOCOM 主幹研究員(併任)

私が GLOCOM に出入りするようになったのは、大学院生だった 2000 年の頃からである。2002 年からは研究員となり、2018 年度末までは専任の准教授・主幹研究員として、現所属の武蔵大学に移った 2019 年度からは併任の主幹研究員として、四半世紀以上を GLOCOM で過ごしてきた。国内の地域情報化や社会イノベーションの現場を駆け回り、海外の専門家や先進事例のもとへ飛び込んで研究と実践を重ねる研究スタイルが形成されたのも GLOCOM という場があったからだ。ブロードバンド普及の黎明期から、ソーシャルメディアの誕生期・普及期を経て、DX や AI による社会変革が日々論じられる今日まで、情報社会の最前線に触れ続けてきた経験は、筆者にとって得難い大切な財産となっている。

GLOCOM は、次々と現れる先進技術や先端的なビジネス、興味深い文化現象、そして想定外の社会課題について、多種多様な専門家が集い議論する場であり続けている。社会に表れ始めた変化を、誰より

も早く解釈し考察する。それこそが GLOCOM の情報社会学だ。その醍醐味を研究員として日々体感するなかで、筆者が教科書のように繰り返し手に取ってきた一冊がある。公文俊平編『リーディングズ情報社会』(NTT出版、2003)である。

本書は、国内外の情報社会論の古典を集めたアンソロジーだ。ダニエル・ベル『脱工業社会の到来』、アルビン・トフラー『第三の波』、ニコラス・ネグロポンテ『ビーイング・デジタル』、増田米二『原典情報社会』など、産業社会に続く新たな社会段階としての「情報社会」を展望した文明論のエッセンスが収められている。さらに、ケネス・ポールディング「来たるべき宇宙船地球号の経済学」、ドネラ・メドウズ『成長の限界』、ガレット・ハーディン「救命艇上に生きる」といった文献が示すように、資源・環境・倫理の視点をも射程に収め、情報化を広義の社会変動として捉えている点に本書の特徴がある。これらの文献は、眼前で起きている現象を過去の知的営為の系譜に位置づけ、今後の社会実装を構想するための知的基盤を筆者に与えてくれた。

しかし、本書の刊行から 20 年以上が経過している。その間も、情報社会はさまざまな出来事を経験し、理論もさまざまな方向に展開してきた。そこで以下では、あくまでも筆者の観点からではあるが、この二十数年間の出来事と情報社会論の理論的展開を見渡し、「筆者にとっての情報社会学」の基礎に据えてきた「邦訳のある海外文献」を①社会構造、②ネットワーク、③情報の生産と所有、④公共性と分断、⑤プラットフォーム支配という五つの観点から整理してみたい。いわば、筆者自身の『続・リーディングズ情報社会』である。

まず情報社会をめぐる理論の大枠を捉えるうえで、マニユエル・カステルの一連の仕事は重要である。

社会の基本構造がネットワーク化していることを示したカステルは、情報社会論を文明論から社会構造論へと拡張した。その議論は『インターネットの銀河系——ネット時代のビジネスと社会』（東信堂、2009）において、インターネットがビジネス・文化・政治をいかに再編しているかという実証的な分析へと結実している。またネットワーク化する社会において、誰がその変化を牽引するのかという「担い手」論において新たな観点をもたらしたのが、リチャード・フロリダ『クリエイティブ資本論——新たな経済階級の台頭』（ダイヤモンド社、2008）である。科学者・芸術家・エンジニア・デザイナーといった創造的な「クリエイティブ・クラス」の人材が集積する都市こそが経済成長の核となるという彼の議論は、情報社会における人材像と、そのような人材が実際の都市や地域にどう関わるのかという議論を架橋した。特に技術や才能に寛容な都市環境が創造性を育むという主張は、筆者自身の地域情報化研究にも少なからぬ影響を与えた。

一方、「ネットワーク」という抽象的な概念を新たな角度から捉え、筆者に大きな衝撃を与えたのが、2000年代に相次いで登場したネットワーク科学の諸著作である。1998年にワッツとストロガッツ、翌年にはバラバシらが、分野を超えてあらゆるネットワークに共通する数理的構造を相次いで発見し、複雑系科学の新たな潮流を生み出した。バラバシ『新ネットワーク思考——世界のしくみを読み解く』（NHK出版、2002）は、ハブとスポークからなるスケールフリー・ネットワークの普遍性を、インターネットから細胞内のタンパク質ネットワークまで幅広い事例で描き出した。ダンカン・ワッツ『スモールワールド・ネットワーク——世界を知るための新科学的思考法』（阪急コミュニケーションズ、

2004）は、なぜ見知らぬ人とも数人を介してつながれるのかという「スモールワールド現象」の数理的メカニズムを明快に解き明かした。これらは自然科学の成果ではあるが、情報社会における人間関係や制度の構造を理解するうえでも強力な視座を提供する。

ネットワーク科学の著作が筆者に教えてくれたのは、ネットワークとは単なる「つながり」の比喩ではなく、社会現象の背後に潜む構造そのものを記述しうる分析概念だということである。情報社会において人・組織・知識がどのようにつながり、どのように影響を伝播させるかを考えるとき、ネットワーク科学の視点は社会学や政策論に収まらない普遍的な洞察を与えてくれる。組織論の文脈ではリップナック&スタンプス『ネットワークキング——ヨコ型情報社会への潮流』（プレジデント社、1984）も、階層に代わる水平的なつながりの力を早くから説いた先駆的な著作として挙げられる。ネットワークという概念が、自然科学・社会科学・実践論の三方向から同時に照らされたとき、情報社会を読み解く筆者の視野は大きく広がった。

次に、情報の生産と所有のあり方をめぐる議論の転換がある。その問題提起として重要なのが、ローレンス・レッシング『CODE——インターネットの合法・違法・プライバシー』（翔泳社、2001）である。サイバー空間における規制は法律だけでなく、市場、規範、そして「アーキテクチャ」によって実現されるといふ彼の洞察は、情報社会における制度設計の議論に新たな視点をもたらした。またレッシングは著作権の硬直化に対して「クリエイティブ・コモンズ・ライセンス」を設計・普及させ、知識や創造物の共有を促す実践的な仕組みを社会に埋め込んだ。この問題意識を引き継ぎつつ、情報生産の経済学的基盤を論じたのがヨハイ・ベンクラーである。『協力がつくる社会——ペンギンとリヴァイアサン』（NTT

出版、2013）は、人間の協力本能と分散型ネットワークが結びつくことで、企業や市場とは異なる第三の生産様式が生まれることを示した。この議論はその後、シェアリングエコノミーの勃興やプラットフォーム資本主義への批判的考察へとつながっていく。そして、こうした情報コモンズ論の理論的基盤を提供したのが、エリノア・オストロム『コモンズのガバナンス——人びとの協働と制度の進化』（新装版、晃洋書房、2022）である。共有資源は必ず「コモンズの悲劇」に陥るという通説に反し、適切な制度設計のもとでは持続可能な自治管理が可能であることを実証したオストロムは、2009年にノーベル経済学賞を受賞した。また、この流れと並走して情報財の価格やビジネスモデルを問い直したのがクリス・アンダーソン『FREE——〈無料〉からお金を生みだす新戦略』（NHK出版、2009）である。デジタル情報の限界費用がゼロに近づくことで、「無料」が例外ではなくビジネスの基本原理になるというアンダーソンの議論は、情報経済の構造変化を鮮やかに捉えた。レッシグは制度設計の問題として、ベンクラーは生産様式の問題として情報共有を論じた。アンダーソンはそれを市場原理の観点から補完している。しかし、コモンズのな公共性は必ずしも理想的なものではない。インターネットが人々をつなぐ一方で、むしろ分断を深めるという逆説を早くから指摘したのが、キャス・サン斯坦『インターネットは民主主義の敵か』（毎日新聞社、2003）である。人々が自分の好みに合った情報だけを選択する「デイリー・ミー」的な情報環境は、異なる意見との接触を遮断し、民主主義の基盤を掘り崩すと彼は論じた。さらに彼は、同質な意見を持つ人々がネット上で相互に強化し合うことで極端な方向へと流れていく「サイバーカスケード」という概念を提示し、情報環境の設計が政治的分極化をもたらしうることを警告した。この問題はその後、ソーシャルメディアの普及や、アルゴリズムによるパーソナライゼーションの進展と

ともに現実のものとなっていく。イーライ・パリサー『閉じこもるインターネット——グーグル・パソナライズ・民主主義』（早川書房、2012）は、検索エンジンやSNSのアルゴリズムが各ユーザーに最適化された「フィルターバブル」を形成し、人々を自分と異なる情報や意見から遮断していく構造を鮮やかに描き出した。さらにジョナサン・ジットレイン『インターネットが死ぬ日』（早川書房、2009）は、汎用的でオープンな設計によって革新を生み出してきたインターネットが、セキュリティへの懸念やプラットフォームによる管理強化によってその生成力を失いつつあると論じ、開かれたネットの未来への警鐘を鳴らした。サン斯坦が予見した問題が、プラットフォームの設計として社会に深く埋め込まれていることを、パリサーとジットレインはそれぞれ異なる角度から描き出したといえる。

こうした問題の背景にあるのが、グローバルに活動する巨大プラットフォーム企業の台頭である。スコット・ギャロウェイ『the four GAFAs——四騎士が創り変えた世界』（東洋経済新報社、2018）は、グーグル、アップル、フェイスブック、アマゾンの4社がいかに私たちの根源的な欲求を捉え、既存の産業・社会・民主主義を塗り替えていったかを鮮やかに描き出した。かつてオープンな公共インフラとして構想されたインターネットは、少数のプラットフォーム企業の行動によって左右される巨大な社会基盤へと変貌した。この変貌プロセスに歴史的な文脈を与えてくれるのが、ティム・ウー『マスタースイッチ——「正しい独裁者」を模索するアメリカ』（飛鳥新社、2012）である。電話・ラジオ・テレビ・インターネットと繰り返されてきた「オープンな黎明期→独占による支配」というサイクルを描いた本書は、プラットフォーム企業の台頭が歴史の必然ではなく制度設計の帰結であることを示し、インターネットの開放性をいかに守るかという問いを突きつける。さらに、こうした独占を生み出す構造そのものの根本

的な処方箋を提示したのが、ルーファス・ポロック『オープン・レポリユーション——情報の時代のルールを書き直す』（日本語版ウェブ公開、2020）である。著作権や特許という独占権を「報酬権」に置き換え、すべてのデジタル情報をオープンにしながらクリエイターへの報酬も確保するという彼の構想は、情報コモンズ論の延長線上に位置しつつ、プラットフォーム支配への最も根本的な応答の一つといえる。こうした思想を背景に彼が創設したOpen Knowledge Foundationは、世界的なオープンデータ運動を牽引し、シビックテックやオープンサイエンスなど市民社会主導の情報社会形成に影響を与え続けている。その知的系譜と実践的運動に、筆者もGLOCOMを拠点として関わってきた。社会の分断と支配、信頼と協働の問題をどう分析し、いかに実際の運営に結びつけるかは、情報社会における中心的な問いとして存在し続けている。

ここまで①社会構造、②ネットワーク、③情報の生産と所有、④公共性と分断、⑤プラットフォーム支配という五つの観点で整理してきた。だが紹介できたのは私の情報社会学を形作った一部の文献でしかない。オープンガバメントやデジタルトランスフォーメーションに関する議論、ビッグデータやパーソナルデータの活用に関する議論、そして近年のAIと社会の関わりを巡る議論などを含められなかった。また、あえて日本語訳が刊行されている書籍に限ったため、論文や記事、マンガ・小説・映画作品等を含められず、何より日本人による情報社会論の系譜を描くことができなかった。

GLOCOMはこれまで、情報社会の理論と実践の双方において重要な役割を果たしてきた。その知的伝統を継承しつつ、次の段階に進むためには、個別領域の深化にとどまらず、それらを横断する統合的な

視座が求められる。本稿で提示した文献群が、そのための出発点となれば幸いである。

【参考文献】

- [1] 公文俊平編(2003)『リーディングズ情報社会』NTT出版
- [2] マニエル・カステル著、矢澤修次郎・小山花子訳(2009)『インターネットの銀河系——ネット時代のビジネスと社会』東信堂
- [3] リチャード・フロリダ著、井口典夫訳(2008)『クリエイティブ資本論——新たな経済階級の台頭』ダイヤモンド社
- [4] アルバート・ラズロ・バラバシ著、青木薫訳(2002)『新ネットワーク思考——世界のしくみを読み解く』NHK出版
- [5] ダンカン・ワッツ著、辻竜平・友知政樹訳(2004)『スモールワールド・ネットワーク——世界を知るための新科学的思考法』阪急コミュニケーションズ
- [6] J・リップナック、J・スタンブス著、正村公宏・社会開発統計研究所訳(1984)『ネットワーク——ヨコ型情報社会への潮流』プレジデント社
- [7] ローレンス・レッシング著、山形浩生・柏木亮二訳(2001)『CODE——インターネットの合法・違法・プライバシー』翔泳社
- [8] ヨハイ・ベンクラ著、山形浩生訳(2013)『協力がつくる社会——ペンギンとリヴァイアサン』NTT出版

- [9] エリノア・オストロム著、原田禎夫・齋藤暖生・嶋田大作訳(2022)『モンスのガバナンス——人びとの協働と制度の進化』晃洋書房
- [10] クリス・アンダーソン著、小林弘人監修、高橋則明訳(2009)『FREE——〈無料〉からお金を生みだす新戦略』NHK出版
- [11] キャス・サンスティーン著、石川幸憲訳(2003)『インターネットは民主主義の敵か』毎日新聞社
- [12] イーライ・パリサー著、井口耕二訳(2012)『閉じこもるインターネット——グーグル・パソナライズ・民主主義』早川書房
- [13] ジョナサン・ジットレイン著、井口耕二訳(2009)『インターネットが死ぬ日——そして、それを避けるには』早川書房
- [14] スコット・ギャロウェイ著、渡会圭子訳(2018)『the four GFA——四騎士が創り変えた世界』東洋経済新報社
- [15] ティム・ウー著、坂村健監修、斎藤栄一郎訳(2012)『マスターズスイッチ——「正しい独裁者」を模索するアメリカ』飛鳥新社
- [16] ルーファス・ポロック著、豊倉幹人・渡辺智暁訳(2020)『オープン・レボリューション——情報の時代のルールを書き直す』
<https://docs.google.com/document/d/1MXIRWb8SXhTndr-UF1mXoXoA8ztL0zaOhToZQcWM/edit?tab=t.0> (最終閲覧 2026/4/24)



GLOCOMウェブサイトにて、全文ダウンロードいただけます。

印刷版は、Amazon.co.jpにてご購入いただけます。



<https://www.glocom.ac.jp/publicity/chijo/11795>

智場 #125

情報社会研究のポリログ — AI、ガバナンス、智の実装

責任編集	伊藤 将人、小林 奈穂
監修	砂田 薫
編集・制作進行	武田 友希
発行人	松山 良一
発行日	2026年7月9日
発行所	国際大学グローバル・コミュニケーション・センター (GLOCOM) 〒106-0032 東京都港区六本木6-15-21 ハークス六本木ビル 2F URL https://www.glocom.ac.jp/ TEL 03-5411-6677 E-mail inquiry-glocom@glocom.ac.jp
印刷・製本	株式会社 紙藤原
校閲・校正	濱田 美智子
表紙・装丁	株式会社 コンセント

『智場』は、国際大学グローバル・コミュニケーション・センター (GLOCOM) が発行している機関誌です。

「智場」は、「知識や意見の交換と流通の場」を意味する言葉です。

1995年に創刊され、情報社会学のフロンティアに挑み続けています。

©Center for Global Communications, International University of Japan, 2026.